聖堂内が元の配置に戻って…

田中圭祐

新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、信徒同士の【距離】を確保するために変更していた聖堂の座席を以前から使用していた木製の長椅子に戻すことになりました。コロナ禍においては、【ソーシャルディスタンス】や【距離感】という言葉が話題になったことは記憶に新しく、こうして写真で見比べてみると、改めてその違いに感慨深いものがあります。そこで 2 枚の写真をきっかけに、コロナ前後の変化や互いの距離について考えていたときに、興味深い記事をみつけました。

（株）第一生命経済研究所ホームページにある『ライフデザインレポート』によると、イギリスの慈善団体 Charities Aid Foundation が、「過去 1 か月間に助けを必要としている見知らぬ人を助けた」と答えた人の割合の 10 年間（2009～2018 年）の平均が、日本は 24%で世界最下位だというのです。

その後、2020 年（新型コロナが世界的に蔓延した年）の調査では、「見知らぬ人を助けた」と答えた人の世界平均は 55%で調査実施以来、過去最高となり、その理由を「パンデミックの間、世界中のコミュニティが一丸となって相互支援をおこなったため」と分析しています。

しかし、2020 年の日本におけるこの割合は 12%で、またしても世界最下位（114 位）で、世界ではポイントが上昇しているにもかかわらず、日本は 24%→12%と更に下降しているというのです。

日本の場合、「自分が感染するリスクがあるので・・」とか「手を貸すと、相手が感染リスクを感じて嫌がるかも・・」という回答も多く、新型コロナウイルスの感染が拡大する前から、助けを必要としていそうな人や電車の座席を譲ったほうがよさそうな人などがいても、断られたり嫌がられたりすることを恐れて、なかなか行動に出られない傾向や、相手が嫌がるかもしれないとして相手のことを懸念する、ある種の“日本人らしさ”があるのでは、と書かれていました。・・・いかがですか？

この例では、相手との物理的な【距離】が問題ではなく、手助けをするかどうか、相手に近づくかどうかは、自分が“選んでいる”ということ。“選んでいるつもりで、選ばれている私たち”

『あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ。』（ヨハネ 15:16-1）
『その名は、インマヌエル（神が私たちと共におられる）』（マタイ 1:23）

“ともに”といえば、“シノドス”について書かれた大塚司教様の年頭所感を読み返してみました。

『コロナ時代を生きる信仰として、シノダリティとは「ともに歩むこと」「ともに歩むあり方」「ともに生きること」ということです』
『この苦難が終わるとき、新しい何かが生み出され、世界全体が今より少しでも良くなっているために、今、わたしたちが変わるためのチャンスなのです。』
『自分は何に価値を置くのか、何を求めるかの優先順位を見直し、日常の中で、勇気をもって新しい歩みを始める救いの時、恵みの時です。マリアにならい、家庭でも、仕事でも、生活の場で出会う人々とともに歩む道こそが、わたしたち信仰者としてのシノダリティです。』

（2023 大塚司教様年頭書簡）

2 枚の写真を手掛かりに“関わり”について考えていくうち“シノドス”に辿りつきました。今こそ、宗教や宗派を超えたすべての人が、ラウダート・シの精神に倣い、①神と、②隣人と、③大地（自然や社会）と、どのように出会い、共に歩めているか、簡単に他人と比較したり、無闇に批判したりすることなく、できることに違いがあることを前提に、一人ひとりが、それぞれになすべきことができるよう、知恵と勇気の恵みを祈りたいと思います。